2021年度　古典B　第11回スクーリング資料

蜻蛉日記（かげろふにつき）　藤原道綱母（みちつなのはは）　泔坏（ゆするつき）の水

作者　藤原道綱母（みちつなのはは）　成立年代　平安時代　ジャンル　日記（三巻）

※女性による本格的かな日記の初め。最初の日記は『土佐日記』で男性（紀貫之）が作者だった。

P148 L1　心のどかに暮らす日…一夫多妻制で通い婚だったので、たまにしか夫の訪問がなかったが、この日は来てくれてよかったということ。

L2　はかなきこと言ひ言ひ…つまらないことを言い合って。

L5　出づるになりぬ…出て行ったのは「兼家」

L5　論なし…言うまでもなく

L5　さやうにぞあらむ…そういうことだろう（兼家が道綱に「もう来ない」と言ったのだろう）

L6　人の聞かむもうたて…周囲の人（侍女など）に聞かれるのも面倒で

L7　音もせず…（夫の）訪問が（五～六日ほども）ない。

L9　かくてやむやうもありなむかし…このように止む（終わってしまう）様なこともあるかもしれない。

L10　ながむ…物思いにふける　眺める

L10　さながらありけり…（水が）そのまま残っていた

P149 L1　かくまで…こんなに（塵が浮く）なるまで

L3　見えたり。例のごとにてやみにけり…兼家の姿が見えた。いつもの調子でうやむやに終わった→結局兼家が来てくれると妻として強く言えないようである。

堀辰雄「かげろふの日記」1937年

紫式部日記　日本紀の御局　紫式部

作者　紫式部　成立年代　平安時代　ジャンル　日記

学習課題⑪説明文

一、消息文（せうそこぶみ…ショーソコブミ、と発音する）

P150 L1　左衛門（さいもん）（「さえもん」の短縮形）

L2　え知り侍らぬ…え＋打消＝不可能　知ることができない　理解できない　心当たりがなくてわからない

L3　内の上の…天皇が→ここでは一条天皇のこと

L4　才（「ざえ」、と発音する）

L5　才がる…才能をひけらかす

殿上人（てんじょうびと　天皇が日常生活を営む「清涼殿」に上がることを許された人）

L6　ふるさと…ここでは「実家」の意味ですが、「古い都」という意味でも頻出する単語。

L7　さる所…問「さる所」とはどのような所か。※宮中のような公的な場

L9　書（「ふみ」と読み、「文」に同じ。）古典で「ふみ」といえば、①学問　②漢籍　③漢詩　④手紙　のどれか。

ここでは②漢籍　のこと。

消息文に見る他人への評価

清少納言評

得意顔をしてえらそうにしている。利口ぶって漢字を書き散らしているが、不充分な点がたくさんある。

和泉式部評

趣深い手紙のやり取りをし、歌も見事だが、歌の知識については、優れていると思わない。

赤染衛門評

優れた歌人というわけではないが、味わい深い歌で、こちらが気後れするほどの詠みぶりだ。

和泉式部日記　和泉式部　夢よりもはかなき世の中

作者　和泉式部　成立年代　平安時代　ジャンル　日記

※百人一首では「あらざらむ　このよのほかの　おもひでに　いまひとたびの　あふこともがな」が有名。娘の小式部内侍も「おほえやま　いくののみちの　とほければ　まだふみもみず　あまのはしだて」で有名。（『十訓抄』に定頼中納言とのやり取りがある。）

P152 L1　世の中…男女の仲　四月…「うづき」と読む方が望ましい。

L2　築土（ついひじ）…東京の「築地」という地名の成り立ちと同じである。埋め立て地、地面を固めて作った土地。

L3　透垣（すいがい）

L7　名残（なごり）

P153 L2　昔のやうにはえしもあらじ…（あなたも）昔のようにはいられないでしょう（え＋打消＝不可能）

L5　橘の花…その香が「昔のことを思い出させるもの」とされている。

L6　言葉にて…口頭で

L7　かたはらいたくて…きまりが悪くて

L15　ゆめ人に言ふな…決して人に言うな（ゆめ＋打消＝決して～ない）

一、一四五首の和歌が織り交ぜられていることが特徴である。

二、**読みに注意！**　故宮・為尊親王（ためたかしんのう）、小舎人童（こどねりわらわ）、帥の宮（そちのみや）

四、「人はことに目もとどめぬを」…他の人は特にそれに目を留めなかったが（私は、それをしみじみと眺めていた）

八、『古今和歌集』「五月（さつき）待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

※橘も、P153の二首の和歌に出てくる「ほととぎす」も五月（仲夏）を表すもの。俳句でいうと「夏」の季語になる。

その他の日記作品

「讃岐典侍日記（さぬきすけにっき）」　藤原長子　上下二巻　平安時代

・堀川天皇発病から崩御までが上巻。下巻は鳥羽天皇に仕えながら堀川天皇を追慕する心情が描かれる。

「十六夜日記」　阿仏尼　鎌倉時代（一二八〇ころ）

・我が子の領地争いの訴訟のため、京から鎌倉へ下る旅の日記的紀行文。全編に母性愛があふれている。